

Newsletter

CONTENTS

- 所長あいさつ Pg.1
- オンライン公開シンポジウム 2023.10.7 / 2024.2.10 Pg.2
- 所員紹介〈第2回〉 Pg.3
- 研究報告 Pg.4

No.81
Spring, 2024



所長あいさつ

武川 恵子

2023年に生まれた日本人の赤ちゃんは、72.6万人、合計特殊出生率は1.20になる見込みと日本総研から発表されました。出生数が110万人を切ったのは2005年、100万人を切ったのが2016年、90万人を切ったのが2019年、80万人を切ったのが2022年、そして70万人を切るのは今年でしょう。少子化の恐ろしい加速度を感じざるを得ません。女子大学は今まで55万人の受験世代の女子を対象に募集してきたわけですが、18年後には35万人を、その先も減少の一途の女子学生を対象に運営をしていくこととなります。今とは全く異なる景色がそこには表れているでしょう。勿論これは、日本全体の問題でもあります。

このような中、日本国民として生まれてきてくれた子

どもを、誰一人取り残さないで包摂する覚悟が日本の国にあるのでしょうか。2022年の婚姻数は50.5万件、離婚件数は17.9万件でした。今や子どもがいる夫婦が離婚することは日常的に起こりうることとして、現行制度の不備を早急に直していかなければなりません。このニュースレターが出る頃には、離婚に伴う親権の問題等に関する民法改正が国会で審議されているでしょうが、ルールの改正だけでなく、公的な支援のための家庭裁判所等の機能の相当な強化がなければ子どもの安全と幸福は図れないでしょう。他にも、婚外子に対する嫡出・非嫡出の差別的な区別、認知、養育費、児童虐待、子どもの貧困、生殖医療のルールと生まれた子どもの権利等、今の国家予算の使い方と比べると僅かな予算で対応できると思われる問題が余りにも放置されています。そして子どもの問題の殆どは女性の問題でもあります。子どもを守り育てるのは母親だけの責任ではなく、母親との婚姻の如何に関わらず父親にも同等の責任と義務があり、社会全体、日本の国家の責任でもあるのに、母親の問題だと思われることが問題なのです。

(ビジネスデザイン学科特命教授・元内閣府男女共同参画局長)



第16回 昭和女子大学女性文化研究賞・女性文化研究奨励賞（坂東真理子基金）



男女共同参画社会形成の推進と女性文化研究の発展に寄与する研究を対象とし、
男女を問わず趣旨にあった著作（単行本）に対し、授与するものです。

応募対象：2023年1月1日から12月31日までに出版され、日本語で著された単行本。
選考発表：2024年5月1日（水）本学創立記念式典にて



～沢山のご応募をいただきまして、誠にありがとうございました～



女性文化研究所オンライン公開シンポジウム

『女性文化研究叢書第13集』刊行記念シンポジウム
「コロナ禍で何が変わり、何が明らかになったのか：研究成果とこれからの社会に向けた現場・研究者からのメッセージ」



2023年10月7日（土）
10:00～12:00
@ Zoom ミーティング

総合司会 武川恵子（女性文化研究所長）
開会挨拶 金尾 朗（昭和女子大学学長）

【第1部】 グループによる成果発表・コメント

1. コロナ禍の企業の労働グループ
大橋重子特別研究員（大正大学准教授）
瀬戸山聡子特別研究員（帝京平成大学特任教授）
2. 介護家族の状況グループ
伊藤 純所員（本学大学院生活機構研究科教授）
吉田仁美特別研究員（日本大学准教授）
3. エssenシャルワークグループ
北本佳子副所長（本学大学院生活機構研究科教授）
斎藤弘美氏（全国母子生活支援施設協議会副会長）
4. 国際機関レポートグループ
青木美保所員（本学食安全学科准教授）
池上紗矢香氏（内閣府男女共同参画局調査室長）

【第2部】 トークセッション

「アフター・コロナ時代に向けての課題とあり方」

コーディネーター 坂東真理子（昭和女子大学総長）
閉会挨拶 志摩園子所員（国際文化研究所長）



充実した成果発表後のトークセッションでは、坂東総長のコーディネートにより、各グループ横断での活発な議論となった。

※Zoom参加78名（登壇者・所員等を含む）、アンケート回答32名

【昭和女子大学源氏物語シリーズ企画第2弾】
「男女共同参画・女性活躍の時代に向けて：
源氏物語・紫式部に学ぶ」

2024年2月10日（土）10:00～12:00
@ Zoom ウェビナー



総合司会 武川恵子（女性文化研究所長）
開会挨拶 金尾 朗（昭和女子大学学長）

【第1部】 講演

男女共同参画・女性活躍の時代に向けて 坂東真理子（昭和女子大学総長）
貼交屏風から見る源氏物語の享受 胡 秀敏（昭和女子大学名誉教授）
紫式部に対するまなざし—賢・虚・聖— 家塚智子（宇治市源氏物語ミュージアム館長）

【第2部】 コメント・質疑 応答・トーク

コーディネーター 坂東真理子（昭和女子大学総長）

閉会挨拶 北本佳子（女性文化研究所副所長）

源氏物語絵貼交屏風（昭和女子大学図書館所蔵）
左上：空蝉／右上：野分／左下：橋姫



本学図書館・光葉博物館でのコレクション展「源氏物語の世界」（企画第1弾）を受け、『源氏物語』と作者の紫式部を男女共同参画の視点でとらえ、講演・トークセッションを行った。アンケートでは、紹介された美術品への興味、女性登用の今日的課題や『源氏物語』における平安文化と中世史の融合した内容についての気づきなど数多く寄せられた。

※Zoom参加131名（登壇者・所員等を含む）、アンケート回答52名

女性文化研究所 所員紹介 〈第2回〉

「所員としての10年」

友野 清文

私が本研究所の所員となったのは2014年度でした。掛川典子副所長（当時）からお声がけを頂いたのがきっかけでした。それから10年になります。

所員となって最初にしたのは、研究会での2回の報告でした。一つは、2013年に刊行した『ジェンダーから教育を考える 共学と別学／性差と平等』（丸善プラネット）についてでした。自己紹介を兼ねたもので、問題関心や研究内容についてのお話をしました。もう一つは、「男性（主夫）が気持ち良く家事や育児ができる環境について」というテーマでの研究報告です。これは、大学外のひととの共同研究で、2014年9月に日本ジェンダー学会で発表したものを再構成したものです。



『ダイバーシティと女性
新しいリーダーシップを創
る』（昭和女子大学女性文化
研究叢書第11集 御茶の水
書房 2019年2月）での「第
8章 女性リーダーの資質と
その育成 一昭和女子大学・
リーダーズアカデミーの実

践と課題」を執筆しました。副題のように、2012年度から始まった本学のリーダーズアカデミーの活動を跡づけ、リーダーシップのあり方と育成について考えたものです。執筆に際しては、事前報告会が行われ、坂東眞理子所長（当時）からご助言を頂く機会もありました。同時に、それまでの活動の記録や参加した学生のレポートについては、学長室の担当職員の方に大変お世話になりました。さらに参加した学生や教員からの聞き取りも行いました。本学の学生は「リーダーシップ」という言葉に尻込みをする場合も多いように思われますが、リーダーシップの多様なあり方を実感し、他学科の学生と協働する中で自己理解も深まるという経験は、貴重なものであると感じました。

ジェンダー研究は学際的なもので、様々な視点からのアプローチが必要です。教育や歴史の立場から考えることの多い私にとって、本研究所は、経済・経営・労働などからの知見を学ぶことができる場となっています。

（全学共通教育センター教授・女性文化研究所所員・現代教育研究所長）

「次世代に少しでもよりジェンダー平等な社会を」

武川 恵子

37年余の国家公務員生活を終えて、2019年から本学のビジネスデザイン学科に奉職すると同時に女性文化研究所に所属させていただいています。

ジェンダーギャップ指数のランキングが徐々に低下しているように、日本の男女平等度は諸外国に後れをとっており、しかも差は拡大しています。原因は明らかで、政治分野で効果的な政策が打ち出されていないこと、家事育児負担が女性に偏り思うように職務経験が積めず指導的地位に就くのが難しいことです。

更には、性犯罪に関する刑法の規定が1907年以来110年ぶりの2017年と2023年の2回でようやく一応の改正がされたこと、1897年に成立した家族法は2022年12月に母親に嫡出否認権を認める改正がされ、併せて女性のみの再婚禁止期間も解消されるなど、基礎的な制度の改正が極めて遅いことも大きな問題です。現在でも、離婚家庭や非婚片親家庭の子どもに対しては、諸外国に比べてあまりにも制度が遅れています。



日本では女性政策は国連の取組と女性団体の支援を両輪にして歩みを進めてきましたが、アカデミックな研究、特に諸外国の政策との比較研究は、政策立案に当たって大いに理論的支柱となってきました。また、現行制度の沿革や慣習などに関する研究は、伝統とされているものが実は明治以降の比較的新しいものであることを明らかにし、女性政策の進展を阻む伝統論に根拠がないことを示してくれることもあります。

私はアカデミックなバックグラウンドではありませんが、アカデミックな研究成果を人々の取組に繋がるものに翻訳し、光を当て、また、自らも微力ながら改革につながる研究を進め、次の世代に少しなりともジェンダー平等の改善した社会を残すべく取り組んでいきたいと思っています。

（ビジネスデザイン学科特命教授・女性文化研究所長、元内閣府男女共同参画局長）

研究報告 Workshop Report

第178回研究会
2023年度女性文化研究所研究員・特別研究員
合同研究報告会

2024年2月28日(水) 15:00～17:00
学園本部館3階中会議室／Zoomハイブリッド開催

司会：武川恵子女性文化研究所長

恒例の合同研究報告会は、コロナ禍でのZoom開催から初めてのハイブリッド開催となった。坂東眞理子総長をお迎えし、北本佳子副所長をはじめ、報告者との活発な質疑応答がなされた。閉会後は賑やかに所内関係者との交流会を実施した。
※参加者：報告会24名／交流会15名



合同研究報告会での集合写真

〈プログラム〉

第一部

1. 胡秀敏特別研究員「昭和女子大学図書館所蔵『源氏絵貼交屏風』の研究」
2. 阿部美香研究員「ハーバード美術館 南無仏太子像に込められた願い」
3. 遠藤由紀子研究員「近代日本と世界につながる信州の女性たち」
4. 高橋美織研究員「戦時下の茅野雅子」
5. 柴田聡子研究員「ヴィクトリア朝時代に生きる女性たち：『乳しぼりの娘のアヴァンチュール』における自然と女性観」
6. 清水みち特別研究員「James JoyceのDublinersとUlyssesにおけるtextileと「編む・縫う」行為について」

第二部

7. 武藤麻香特別研究員「The Canterbury Talesにおける色彩語表現」
8. 歌川光一特別研究員「『友だち化教育』とジェンダー」
9. 大橋重子特別研究員「雇われない働き方と企業の人材育成」
10. 清水直美研究員「業務委託営業という働き方における課題と可能性：業務委託営業を活用する企業による生命保険営業職の応用事例から」

※質疑応答：第1部・第2部終了時

【録画報告】

- 太田鈴子研究員「東京日本橋 老舗の女性：神茂を支えた15代目の妻はま氏」
- 斎藤悦子研究員「福井県共働き夫妻の食家事労働：調理実演調査にみる夫妻の動作の差異」
- 佐藤麻衣特別研究員「アメリカにおける日系人女性芸術家の研究」
- 杉田あけみ特別研究員「ウェルビーイングに関する一考察」
- 瀬戸山聡子特別研究員「労働者のキャリア支援に関する事例研究」
- 宮坂順子特別研究員「離婚過程の女性が抱える課題と支援ニーズについて」
- 山本咲子特別研究員「女性非正規雇用者の生活の質評価：ケイバビリティ・アプローチによる実証研究」
- 吉田仁美特別研究員「自然災害と障害者ジェンダー統計」

(2023年度合同研究報告会 実行委員：阿部美香研究員・遠藤由紀子研究員・高橋美織研究員)

